二〇一〇年五月二六日（奈良公園 参加者一五名）

老鶯の春日社の森こだまして　はく子
鹿の耳ぴくぴく動く新樹風　〃
飛火野に集ふ吾らに風薫る　〃
行厨にぬっと顔出す孕み鹿　〃
薫風や絵図をたのみに古都巡る　ぽんこ
塔の影水面に乱れ青嵐　〃
万緑や池鏡なる浮見堂　〃
一の鳥居しのぐ老松色変へず　かれん
飛火野の起伏をかすめ夏つばめ　〃
どの道をとるも水音森涼し　〃
連子窓続く回廊若葉風　わかば
えごの花散り敷く所禰宜の径　〃
遠近に田掻く人影斑鳩路　よし女
万緑や足輪も太き仁王尊　〃
青苔をむす走り根の力かな　三刀
笑み涼し言の葉やさし春日巫女　〃
梅天下甲羅干しなる貸ボート　ひかり
新緑の四囲にせりだす浮見堂　〃
子らの声弾け飛火野夏兆す　きづな
地にふれむばかり藤蔓木下闇　〃
揚げ雲雀大和の山は高からず　つくし
掃かずある直哉旧居の春落葉　〃
温かや初めて集ふ句会の座　ひろみ
亀の甲乾き始めし梅雨晴間　〃
神杉の太き走り根木下闇　明日香
枝分れの気配を早やも袋角　菜々
参道に天降る香は楠新樹　満天
竹皮をぬぎて天へと直立す　〃

吟行句会みのる選

二〇一〇年五月二六日（奈良公園 参加者一五名）